
そして、僕らは、輝き出す。

穹宇祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして、僕らは、輝き出す。

【Nコード】

N6357S

【作者名】

穹宇祭

【あらすじ】

きつとこれは神様のイタズラなんだろう。

出逢う事なんてありもしなかった。

それでも再び巡り逢えた。

それを奇跡と呼ばずになんと呼ぶのだろう。

夏の始めにみた蜃気楼。

それが全ての始まり。

それがこの物語の始まり。

この物語の全て……。

一日目

僕らが過ごす一夏の物語。

それは僕らで過ごす最後の夏のお話。

昔、感じたあの想い……。

変わらずもってられること。

それが僕らの在り方だった……。一日目

蝉はたしか成虫になると一週間ちかくで亡くなると聞いた。

でもそんなことが嘘かのように思えるほど、

家の外では蝉達が夏の風物詩とも言える、大合唱を響かせていた。

さらに時間帯によって聞こえてくる音は異なってくる。

さっきまで油蝉が鳴いていたと思えば、

夕暮れと共に蝸達が声をあげ始める。

きっと彼らにもなにか掟があるのだろう。

でなければあんなに綺麗に別れて自らの声をあんなに美しく奏でられるはずがない。

それは人も同じだ。

人は少なからず掟に縛られなければ輝くことなんて出来ないのだ。

当たり前前の発想だろう。

ルールという概念がなければスポーツは必ず成り立たなくなる。

ルールがあるからこそ人は輝くことが出来るのだ。

よって結論。

蝉も人も考えようによっては同じような境遇に立っている。即興で考えてみたが対して面白味もない。

家の外で鳴り響く蝉達のを嫌でも聞けばこのくらい考えてしまうのだらう。

クーラーも効いていない部屋で夏休みの課題に苦戦してる俺はふと窓のほうに目をやった。

目の前に広がるのは一面の緑。

そして、舗装もまだらにしかされていない道路。

さらには人が住んでいるかもわからない古い建物。

ここが俺の生まれ育った故郷だ。なんも味気もないただの田舎。

そんな田舎だけど俺は愛着を持って暮らしていた。

本来、今の時期は夏休みなのだが、遊ぶことなくただひたすらに目の前にある課題に励んでいた。

昔はよく近所の子と遊んでいた。年も近かったこともあり、色々な遊びをしていた。

でもそれはもう、昔の話だ。

今はそんなこと気にしてない。

只今の時刻、 12時 25分。

昼飯を食べるにはもってこいの時間帯だ。今やっていることをひとまず止め、台所に向かった。

両親は共に働いており、帰ってくるのがいつも夕方過ぎだ。

だから夏休みなどの休日の昼は自分で飯を作るのだ。

今日も張り切っていたいこうと腕捲りをしてさあ始めようとしたとき、俺は異変に気付いた。

台所の床で倒れ込んでいる人を見つけてしまったのだ。

例えるならそれは芋虫。

もっと上品な言い方をすると

某す巻き女。

そんな物体はこちらの姿に気付き一言。

「お腹、空いた」と・・・。

今、俺の目の前でラーメンをバクバク食べているのは、

どこからどう見てもアイツだった。

でもどうしてか解らない。

きっと暑いから蜃気楼でも見ているのだろう。

だって目の前にいる桐島夏希は今から10年前に死んでいるんだから・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6357s/>

そして、僕らは、輝き出す。

2011年11月16日18時28分発行